

昭和五十二年一月七日—九月

④ 昭和三十二年二月十七日  
「蒲江の漁具展」は、蒲江地区公民館で開く。地元の於ける漁具・民具保存のPRが目的であったが、八日は千松副知事ご臨席、「蒲江の漁具保存会」が、ふるさとづくり振興事業として顕彰された。

NHKテレビでは「大分おおぶろしきこぶろしき」で、「蒲江の漁具」が紹介され、これが収集・整理に当られた、富沢・西元外多くんの方々の働きが表面に出た。

以上のような展開で、「蒲江の漁具」は、一先ずその総集成をなすとけ、遂に会願の、県指定有形民俗文化財となった。時、昭和五十三年三月、名称は「蒲江の漁具」、収蔵数五五〇点である。  
今後の努力点は、まず次の二点を考えている。

(その一)

国指定民俗文化財をめぐって

調査収集をはじめ、僅か三年、年間を通して調査・収集の結果、県指定文化財となったが、各地区(蒲江)にはまだまだ相当数の漁具・民具・古文書があることを確認している。

これまでは収蔵庫などなかったために、収集・保存が思うようにいかなかったが、幸い蒲江高校新築移転後の施設が町中央公民館となり、かなり収蔵ができるようになった。

そこで、昭和五十四年度から、ふたたび調査・収集を進め、国指定文化財をめぐります。

(その二)

蒲江にふさわしい資料館の建設を進める

国指定と併行して、蒲江のシンボル「蒲江の漁具・民具」資料館建設を積極的に進めたい。国指定となると収蔵室・修理室・研究室もあるだろう。かなり広い展示室がある。幸い高校跡を教室が多い。  
当事者の奮起が望まれる。

資料

蒲江の風と潮

会員 西元 由雄  
(蒲江町蒲江浦)

まず紹介を

冠着「佐伯史談」一七八号が届きました。相変わらず出来栄に、先生の苦勞が偲ばれます。史料紹介が役に立ってほっとしております。(中略)

蒲江の西元さんから、海流に対する先人の計算方法を戴いておりましたので送ります。

佐伯湯は蒲江の潮とくらべ、三十分違ふことは、大島の漁師から聞いていました。史談資料に当たると、うか、とばかり送ります。

瀬戸内方面は、広島大学と愛媛大学の合同調査書がありますが、豊後水道はまだ手がついていないようです。私も先人の知恵に頼りました。

(後略) 東京 御手洗 一而

として、次のコピーが同封されて届きました。

前路 先日「巴の鏡」御慮送下さいまして、有難く早速拝読させて頂きました。大変参考になります。厚く御礼申し上げます。

さて、満江の風と、潮の流れ等につきお報告申します。

満江の風は、地形や海流に大きく影響されるが、一般的には夏は南、又は南東の風で、さわやかな海風が毎日吹き、冬は北西の季節風が吹く。しかし冬の間は後背の山脈のおかげで、かたや弱められる。

また日中は、海から陸に向って海風が終日そよぎ、反対に夜になると、陸から海に向って陸風が吹く。

しかし、夏から秋にかけて毎年何度かずつ襲ってくる台風はひどい。例外もあるが、台風は初め北東風であるが、微東から南風になり、南西風となると天気は回復する。南西風は長時間吹く。風が変りて吹く風が一帯強く、大水を倒し、家屋をいためたりする。

二月、八月は天候が変りやすく、無風状態からたまに大西風が吹くことが多い。

潮の流れは、満ち潮時は日向灘から豊後水道に向って流れる上り潮で、六時間後反対の下り潮となり干潮となる。

しかし深島沖の黒潮は「日ノ本潮」といって、土佐沖から紀州沖へと流れる。岬に突き当たった潮は逆流する。天候の悪くなる前にも、潮の流れが順調にゆかないことが多い。

満江では、潮の満干を次のように計算している。

日は旧暦を用い、「八・六の法」で算出する。例えは五日の潮は五×八＝四〇で四時が干潮、六時間後の十時が満潮となる。潮の流れは、午後六時間毎に変わるからである。

六日の潮は六×八＝四八で四時、八×六＝四八となり合せて四時四十八分が干潮となる。一日に四十八分ずつずれてゆく。十四日の場合は一四×八＝一一二でまず十一時、それに二×六＝一二で十二分、合せて十一時十二分の干潮となる。

十五日と三十日は十二時が干潮、六時が満潮です。十六日から先は十五日を減らして、十七日は二日十八日は三日のように扱う。

右は満江の場合で、瀬戸内はこれよりおくれ、所々こゝろによって差があります。

旧暦の三月朔日頃が、一年中で一番よく潮が引け、特に夜が引け風大きい。

二十八日から翌月の四日頃迄を大潮と呼び（二十五日頃から十八日頃までを大潮）、その余を小潮と呼んでいるが、干満の度合は毎日少しづつちがう。ご参考になれば幸いです。（下略）

へおと書き

この西元氏の資料は、東京の仲手洗会員の送りました手紙、その内容が史談会員の参考になれりといひて送って送ってくれたものである。早速満江の西元会員の許諾を求めてここに掲載した次第である。ついでに付記すれば干満八六掛の原理は、十五日の十二時の数字比率が八掛に当り、十二時となる。数字点以下は六〇分に掛けて端数の分がきまるといふわけ（別）